

アメリカに真正面から怒り続ける少年ゲンとは？

アメリカが広島に落とした原子爆弾で被爆し、家族を失った少年ゲンが、貧困や偏見に苦しみながらも力強く生き抜く姿を描いた漫画『はだしのゲン』。主人公のモデルは6歳で原爆を体験した作者の中沢啓治さん自身です。「週刊少年ジャンプ」での連載が始まった1973年から半世紀、25ヶ国で翻訳出版され、2024年には漫画のアカデミー賞とも呼ばれるアメリカの「アイズナー賞」を受賞。手塚治虫さんや宮崎駿さんに続き、殿堂入りを果たしました。しかしいっぽうで近年は、「描写が過激」「間違った歴史認識を植え付ける」などと、学校図書館での閲覧制限を求める声が上がったり、広島市の平和教材から消えるなどして、大きな議論を呼びました。なぜ、いまなお一作の漫画がこれほどまでに私たちを熱くするのでしょうか？

戦後80年を経ても消えることのない怒りと悲しみ、そして優しさ

本作は、メディア・アンビシャス映像部門大賞、第15回衛星放送協会オリジナル番組アワード番組部門〈ドキュメンタリー〉最優秀賞などを受賞したBS12スペシャル『『はだしのゲン』の熱伝導～原爆漫画を伝える人々～』の映画化です。監督は「春想い ～初めての出稼ぎ～」『われら百姓家族』など数々の傑作ドキュメンタリー番組を手がけてきた込山正徳。映画化に際して、込山監督を敬愛してやまない大島新（『香川1区』『国葬の日』）と前田亜紀（『NO選挙, NO LIFE』）が共同プロデューサーとして参加しました。「戦後80年」を迎えたいまウクライナや中東では戦火が続き、核の脅威は決して過去のものではありません。映画は不朽の反戦漫画の誕生から現在を見つめ、私たちが生きているこの世界に溢れる、怒りや悲しみ、そして優しさを映し出していきます。



「6歳の中沢さんが見た地獄」から、私たち大人は何を学べるのでしょうか。小さなゲンを常に心に抱くことで、平和ある未来は自ずと形作られるのだと思います。

内田也哉子 文筆家

まだ怒っているゲンが、ずっと問いかけてくる。歴史とは都合よく捻じ曲げられるものだと予見していたのかもしれない。

武田砂鉄 ライター

軍国主義と核兵器の犠牲になった人々の声を背負って、怒り続けたゲン。その居場所が、広島にすらなくなってしまう。

ゲンの怒りは嘆きにもなり、今、わたしたちに向けられている。

もう忘れてしまったのか、再び繰り返すのか、と。

宮崎園子 フリーランス記者

もし、『はだしのゲン』がこれほど広く読まれていなければ……核兵器というものに對して、日本人の多くもまた、いまだにハリウッド映画レベルの呑気な認識しか持てていなかったかもしれない。不愉快な現実＝歴史をこそ直視し語り継ぐとするこの真の「国民的マンガ」を、つまり我々は決して、手放してはならないのだ。

ライムスター 宇多丸 ラッパー／ラジオパーソナリティ



gen-angry.jp

@Gen_Angry_Film

gen.angry

@gen_angry

『はだしのゲンはまだ怒っている』上映会

日時▶ 2026年8月 23日(日) 午後2時上映開始 (30分前開場)

会場▶ アンフォーレ1階ホールにて 安城市御幸本町504-1

上映協力金▶ 1,000円 (障がい者&18才以下は無料)

後援▶ 安城市・安城市教育委員会 主催▶ 上映会 Anjo 090-1737-8429 (天野) ※事前申し込み不要

当上映会の収益金は
国連 UNHCR 協会に
寄付します

上映会 Anjo 公式 LINE



今後の上映会情報をご案内します。ぜひ、ご登録下さい！